

2年B組 国語科 単元設計・学習指導案

指導者 丸山 佑樹

1 日時（場所） 令和5年7月5日（水） 13:30～14:20（2年B組教室）

2 教科領域別研究テーマ

言葉による深い学びを通して「エージェンシー」を育む学習指導と評価の工夫

3 研究テーマ設定の理由

「エージェンシー」とは、変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動する能力だと定義されている。今後、よりよい未来社会を築いていく上で必要となる「エージェンシー」を国語科の授業の中でも高めていくことができるよう、教師が学習指導や評価の在り方を工夫していくことが大切であると考え。

昨年度は、「単元を構想する場面」「授業を行う場面」「振り返りを行う場面」において、生徒の学びや課題、意思決定について生徒と教師、生徒と生徒が共有したり、生徒自身が自覚したりすることができるよう工夫した学習活動を展開してきた。成果としては、生徒と教師、生徒同士の対話を通して、生徒自身が単元や授業の見通しを持って、主体性を発揮しながら日々の学習に取り組むことができるようになった。課題としては、授業での振り返りを効果的に活用できなかったことが挙げられる。

生徒には、授業での振り返りを通して、自分の成長や変容を自覚するとともに、次の授業・単元での学びにつなげさせたい。教師は、授業での振り返りを生徒にフィードバックするとともに、次の授業や単元の構想につなげたり、学びの見取りにつなげたりしたい。したがって、今年度はこれまでの研究を継続するとともに、生徒の振り返りを生徒自身と教師が次の授業・単元に活かせるようにしたいと考え、本研究テーマを設定した。

4 単元設計（単元名：音読を楽しもう 『月夜の浜辺』 中原中也）

(1) 単元目標

- 抽象的な概念を表す語句の量を増やし、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。〔知識及び技能〕(1)エ
- 観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えることができる。〔思考力、判断力、表現力等〕C読むこと(1)エ
- 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝えようとする。〔学びに向かう力、人間性等〕

(2) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
抽象的な概念を表す語句の量を増やし、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。 (1)エ	「読むこと」において、観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えることができる。 C(1)エ	詩中の言葉の意味を理解し、表現の美しさを感じたり効果を考えたりしながら、自分なりに工夫して進んで音読しようとしている。

(3) 指導計画（全6時間）

時間	ねらい・学習活動	重点	記録	評価規準（評価方法）
1	・本質的な問いについて考えることを通して、学習に対して課題意識を持たせる。	態		・これまでの経験や既習事項を振り返り、それらを自分なりの表現で表している。 (デジタルワークシート・観察)
2	・学習計画を立てることを通して、当事者意識や学習への見通しを持たせる。	態		・パフォーマンス課題を解決するために、どのような学習や活動が必要か考えている。 (観察)

	・ 詩に合った音読の工夫を考 えることを通して、表現の 工夫に着目させたり詩の内 容を解釈させたりする。	思		・ 音読の仕方を考えるために、言葉や表現に 基づいて詩の情景や心情を読み取ってい る。 (ワークシート)
3 本時	・ AIによる音読を参考に、音 読の仕方を考えることを通 して、詩の内容に合った音 読にさせる。	知 思		・ 詩中で使われている言葉の意味や表現の意 図を理解した上で、声に出して読んでいる。 (観察) ・ AIによる音読と自分の音読を比較するこ とを通して、特徴的な表現に着目し、その効 果について考えている。 (デジタルワークシート)
4	・ 自分なりの音読になるよう 練習することを通して、よ りよい音読にさせる。	態		・ 詩中の言葉の意味や表現の意図などを考え ながら、自分なりに工夫しながら繰り返し 音読練習に取り組んでいる。 (ワークシート・観察)
5	・ パフォーマンス課題	知 思 態	○ ○ ○	(パフォーマンス課題による評価)
6	・ 学習したことを振り返るこ とを通して、詩を読むこと に対する考えの変容や自己 の成長を自覚させる。	態	○	・ 自身が設定した目標に対する自己評価や音 読に対する他者評価を基に自己の成長や学 習したことを振り返り、それらを次の単元 の学習や他の文学作品の読みに生かそうと している。 (学びログ)

(4) パフォーマンス課題

中原中也の『月夜の浜辺』を音読します。聴く人の心に響く音読を目指して、自分なりに表現を工夫して音読しましょう。

5 本単元と研究主題との関わり

(1) 生徒について

本学級の生徒(32名)は、文学作品を「読むこと」の学習において、自分なりに読みを深め、他者と積極的に意見交流するなど、意欲的な姿勢が見られる。しかし、アンケートによると「詩を読むのが好き」の項目に否定的な回答をした生徒が13名いた。その理由として、「言葉が少なく読み取るのが難しいから」や「読むのに慣れていない」「日常的に触れる機会が少ないから」などが挙げられた。さらに、「声に出して詩を読むのが好き」の項目では、15名の生徒が否定的な回答をした。その理由として、「気持ちを込めて読むのが苦手だから」「声に出すのと心の中で読む違いが分からないから」「声を出して詩を読む必要があまりないと思うから」などが挙げられた。

「詩を読むのが好き」の肯定的な理由として、詩の内容解釈に関するおもしろさを挙げているものがほとんどであった。また、これまでの詩の学習も詩の構成や表現の工夫、言葉の意味などに着目しながら内容を解釈することが中心であった。三角ロジックを用いて論理的に読み取ったことを、生徒主体の話し合い活動によって深めていく学習活動に、学びの深まりや詩への興味関心を高める一定の成果があったと省察するとともに、「声に出して読む」という韻文の良さを感じさせられていないことも明らかとなった。本単元では、音読を中心とした学習活動を行うことで、改めて詩の魅力に気付かせ、詩を深く味わう力を育成したいと考えている。

(2) 単元について

詩は、作者の感動（心の動き）の本質を言葉を用いて表現したもので、言語芸術であると考ええる。言語芸術である詩の読み取りとなると、その詩が何を表しているのかという内容を解釈することに重きを置きがちだが、感動の本質を表すために用いられた秀逸な表現にも目を向けさせたいと考えている。

本単元で扱う教材は詩『月夜の浜辺』（中原中也）である。この詩には、同じ文の反復や詩中の句読点やクエスチョンマーク、文字下げといった特徴的な表現がある。それらの特徴は、音読する際、リズムや間、強弱、速度、声色などをどのように工夫すれば詩に合うかを吟味する必要がある部分である。もちろん、情景をイメージしたり、作者の心情を理解して音読することも必要であるため、音読に生かす意図で、内容解釈も必要であると考えている。

本教材は、教科書『国語2』（光村図書）では、「音読を楽しもう」の単元で、1時間程度の時数で取り扱う音読教材である。しかし、声に出して詩を読む魅力を十分に感じさせることができる教材であると考え、時数を増やして単元構想した。

(3) 指導について

本単元の学習において、国語科の見方・考え方を働かせて「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、以下のような指導を講じる。

ア 音読を中心とした読み

これまで詩の学習では、三角ロジックを使って論理的に詩の内容を解釈する学習を主に行ってきた。言葉をよりどころに情景描写や心情などを読み取ることができるようになってきた一方で、韻文ならではの言葉の調子やリズムといった、声に出して読むからこそ感じる詩の良さを意識させることができていないという指導に対する反省がある。そこで、詩を声に出して読むことを中心とした学習活動を展開することで、詩の魅力に気付かせたい。

また、本単元では、AIによる文章自動読み上げ機能を使う。機械音声と肉声の違いを比較させることで、声に出して読むことの感覚的な良さに気付かせたい。

イ 三角ロジックを用いた対話

「聴く人の心に響く音読を目指して、自分なりに表現を工夫して音読する」というパフォーマンス課題を解決するためには、詩の言葉や表現をよりどころに内容を解釈した上で、それをどのように表現したいか自分なりに考え、工夫して音読しなければならない。なぜそのような音読の工夫に至ったのかを三角ロジックを用いて、論理的に説明し、それを生徒同士で対話させることで学びを深めさせたい。

ウ 学習を自己調整する機会の設定

学習の振り返りに使っているOPP（One Page Portfolio）シート「学びログ」（以下、学びログ）には、学習者が設定した目標の設定、毎授業で学んだことやパフォーマンス課題の解決のために必要なことの記録、単元末の自己評価が書き残されている。設定した目標の達成やパフォーマンス課題の解決に向けて学習者が見通しを持ち、学んだことを自覚して次の学習に生かせるようにする。学びログを活用することで、自ら学習を調整する力を高め、それがエージェンシーの育成に資するものだと考えている。

6 本時の指導（3／6時間）

(1) 主題 AIと自分の音読を比べて、よりよく読もう

(2) ねらい

○詩中で使われている言葉の意味や表現の意図を理解する。

○AIによる音読と自分の音読を比較することを通して、特徴的な表現に着目し、その効果について考える。

(3) 展開

学習活動 (形態)	時間	○教師の働きかけ ・ 予想される生徒の反応	○指導の工夫 ◎評価規準（評価方法）
1 前時の復習 をする。 (一斉)	5	○前回、自分で考えた音読の工夫を意識しながら音読しよう。	○ここまで学んだことを想起するために、前時に自分なりに考えた音読の仕方 で音読させる。
2 よりよい音読 にするための工夫を考 える。 (個人) ↓ (小集団) ↓ (全体)	35 (10) (10) (15)	聴く人の心に響く音読にするにはどうすればよいだろう。 ○AIの音読を聴いて、違和感を感じたところはどこだろう。 ・読み方が棒読みになっている。 →感情が伝わるように、抑揚や強弱など変化をつけて読むべきだと思う。 ・詩の印象よりも明るい感じの音読になっている。 →月夜の晩に浜辺にいることや暗い海辺にいる主人公をイメージすると、この詩は明るく前向きな内容ではなさそうだから、もう少し暗い声色で読む方がいいと思う。 ・間がない。 →いくつかの連に分かれていたり、文字下がりがあったりするのは作者の表現の意図だと思うから、行間や句読点、空白を意識して間をしっかりとって読んだほうがいいと思う。 ・「捨てられようか？」を上がり調子で読んでいる。 →？は疑問形のように上がり調子で読むのは内容としては適切ではないと思う。「捨てられようか、いや捨てられない」と否定する意味だから、下がり調子がいいと思う。	○よりよい音読の仕方を考えられるように、AI音声合成技術を活用して、様々な読み方を聴かせる。 ○全体での対話を深めるために、ロイロノートを使って、各自の考えを共有しやすくする。 ○対話したことを各自の音読に生かせるように、読み方の工夫を三角ロジックで説明するよう促し、考えを共有しやすくする。 ◎詩中で使われている言葉の意味や表現の意図を理解している。(観察)
3 音読の仕方を修正し、練習をする。 (個人・ペア)	5	○話し合ったことを生かして、どうすればよりよい音読になるか考えて練習しよう。 ・月夜の晩に浜辺にいる主人公が小さなボタンを手にしている場面を考えて、ゆっくりと間を十分にとりながら読みたい。 ・最後の「捨てられようか？」は反語表現と捉え、「いや捨てられるはずがないだろう」と言葉が続くように、余韻を持たせるように読みたい。	○よりよい音読のために、意見交流したことを生かして、音読の工夫を見直すよう助言する。 ◎音読の仕方を考えることを通して、特徴的な表現に着目し、その効果について考える。 (ワークシート)
4 本時の学習を振り返る。 (個人)	5	○今日の学習を通して一番大切だったことは何だろう。 ・詩の特徴的な表現を踏まえて音読することが大切である。 ・作者の意図を言葉や表現から読み取ることも大切だが、それを踏まえて自分がどう読みたいかも大切にしたい。	○振り返りを次時に生かせるように、本時の授業を通して考えたことを学びログに書き残すよう声掛けする。

7 研究の視点

○音読を中心とした学習活動は、生徒に詩の魅力に気付かせたり、詩の内容を深く解釈することに関与する活動であったか。

○AIの自動読み上げ機能を使ったICTの活用は学習の効果を上げる上で効果的であったか。